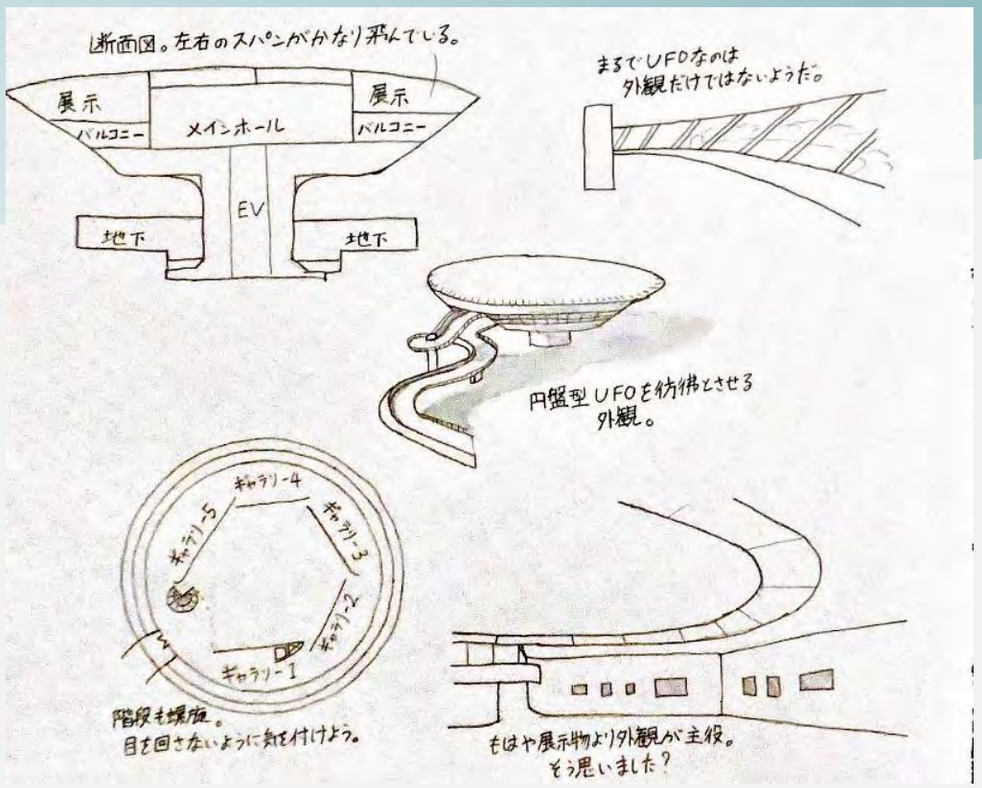
所在地：ブラジル/リオデジャネイロ/ニテロイ RJ 24210-390　構造：プレストレストコンクリート造　階数：地上3階、地下1階　設計：オスカー・ニーマイヤー　構造設計：ブルーノ・コンタリーニ　竣工:1996

文章・写真 4201902 井上陽太
イラスト　4201912 川西心之介

「Unidentified Flying Object?」

画像：http://kenchikubanzai.blog.fc2.com/blog-entry-26.html



ブラジルはリオデジャネイロ州。カーニバルや2016年オリンピックの開催地でもあった高温多湿な地域。その中でもニテロイという場所の岬に建っている。ニテロイの名前は、南米に住む原住民族の言葉で、「隠れた水」や「曲がりくねった港」など様々な意味を持っている。この町は大都市の近くにあるのだが、美しい自然が多く存在しており、観光やリゾート地としても人気がある。この町に住む住民は富裕層が多く、教育機関も充実していることから、憧れの街とも呼ばれることもしばしば。今回は、そんな街に建っている美術館を紹介していく。

この美術館の特徴は、何といってもこの外観にある。設計者のオスカー・ニーマイヤーは、花をイメージして設計したらしいが、私にはUFOを逆さにしたような形に見える。それとも大きなテーブルだろうか。どちらにせよとても美しい形であることに変わりはないが―。自然豊かな周りの環境と対照的に近未来のようなそして、その建物を上がっていく赤いスロープがとても長く、渦を巻いていくような形になっている。まるでレッドカーペットのようなスロープを登っていくと、美術館のエントランスがある。中に入ると、外周がガラス張りになっており、360度景色を眺めることができる展示室がある。円盤型UFOを彷彿とさせるのは内観も同じのようで、ぐるりと一周する激しい角度のついた窓からの眺めはさながら宇宙人になった気分だ。ニテロイの輝く広い海も一歩も動くことなく一望できる。そして肝心の展示空間だが、断面図を見れば分かる通りかなり少ない。絵画をメインに展示しているようだがこの美術館の主役はどうも美術館自身のようだ。美術館としての機能に固執せず本体そのものを展示物とし、地域のランドマークとしての役目ももたせる。保守的で退屈な設計ばかりの建築家には到底真似できないだろう。ちなみに地下空間はレストランやバーになっている。

構造的な話をすると、ニテロイ現代美術館はプレストレストコンクリート造という、引っ張り応力の働く部分にあらかじめ圧縮力を与え引張に耐える範囲を大幅に拡大する構造で、エンジニアのブルーノ・コンタリーニによって設計された。またニーマイヤーは本美術館のように大スパンを飛ばす建築が得意なようで他にも多くの奇抜な建築を生み出している。

「空飛ぶ円盤」の愛称で市民から親しまれているニテロイ現代美術館。この美術館はとても珍しい外観と少し珍しい構造によって建ちニテロイないしリオデジャネイロのひとつの名所として地域を潤わせている。たしかに建築物としての合理性は薄いかもしれない。だが考えつくされた外観・構造とそのインパクトはシンボル的存在として個性ある魅力を放っており、時にはそんな建築も必要とされるのだ。

所在地＝長野県長野市箱清水 1-4-4　構造＝RC 造・PC 造 一部 S 造　階数＝地下 1 階 地上 3 階　延べ面積＝11,324.25m²
実施設計＝宮崎浩/プランツアソシエイツ
施工＝清水・新津建設共同企業体　竣工＝2020 年 12 月

文・写真　4201936　柳井 美咲
イラスト　4201913　岸田 智愛

「え、溶けこみすぎやん。」

周囲と繋がる

この美術館は既存の東山魁夷館や、このエリアのシンボルである善行寺とともに城山公園に囲われた場所に位置している。離れた視点から全体を見ると、周囲の自然や風景に溶け込むようにして美術館が存在しており、「ランドスケープ・ミュージアム」のコンセプトが感じられる。

周囲と溶けこむ

美術館の敷地や建物へのアクセスにはバリアフリーが導入され、高低差が約10mの３つのレベルで設計される地形であっても、それを活かした設計でどの階へも水平移動のみで行き来が出来るようになっている。また、公園から続くテラスや美術館内にある多目的室など、屋内外ともにフリーゾーンが多く取り込まれており、展示を観ることが目的でなくても散歩をしていてふらっと立ち寄れるような気軽さも兼ね備えている。

中庭に立ち入ると、長野美術館と東山魁夷館を結ぶ連絡ブリッジが目を引く。その下には階段状の滝が造成されている「水辺ゾーン」がある。そこでは中谷芙二子さんによる《霧の彫刻》が常設展示されており、霧はその日の光や風の加減によって形を変え、その日その時にしか見ることのできない自由な姿に、壮大な自然の力を感じる。

さらに、屋上に上がると「風テラス」と呼ばれるもう一つのメインのフリーゾーンがある。そこでは展示を観に訪れた人に限らず散歩や遊びの延長で訪れた人も利用できるカフェがあり、人と自然だけではなく、人と人が繋がるような環境ができている。また、木製ルーバーで作られた大庇（長さ 36m・奥行 6m）があり、その延長線上に善光寺が見える景観の良さも魅力の一つだ。

自然と交流の生まれる１階の空間

施設に入るとまずエントランスホールがあり、大階段が出迎える造りになっている。仕上げやレベルを揃えて、内外にあるエントランスホールの階段と水辺テラスの階段が繋がってひとつの大階段に見える設計となっており、見る人の錯覚を覚えるような仕掛けがある。

また、1 階には城山公園から連続するアクセスの良さを活かしてフリーゾーンの「交流スペース」がある。ここでは常時Ｌ字壁に映像作品を上映しており、公園からこの映像が見た人が、少し覗いてみよう、暑いから涼んでいこう、などと自然と入りたくなる空間にする工夫が施されている。

応接室前のテラスからはのぼり庭を楽しむことが出来る。水辺デッキとは対照的に、松代石を自然な風合いそのままに点在させ、親しみやすい空間をつくり出している。

呉高専生による建築巡礼……No.1

福田美術館

京都府京都市／2019 年／安田アトリエ（安田幸一）

所在地＝京都府京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 3-16　構造＝RC 造・鉄骨造　階数＝地上 2 階・地下 2 階　延べ面積＝1,193.58㎡　主要用途＝美術館　実施計画＝安田アトリエ

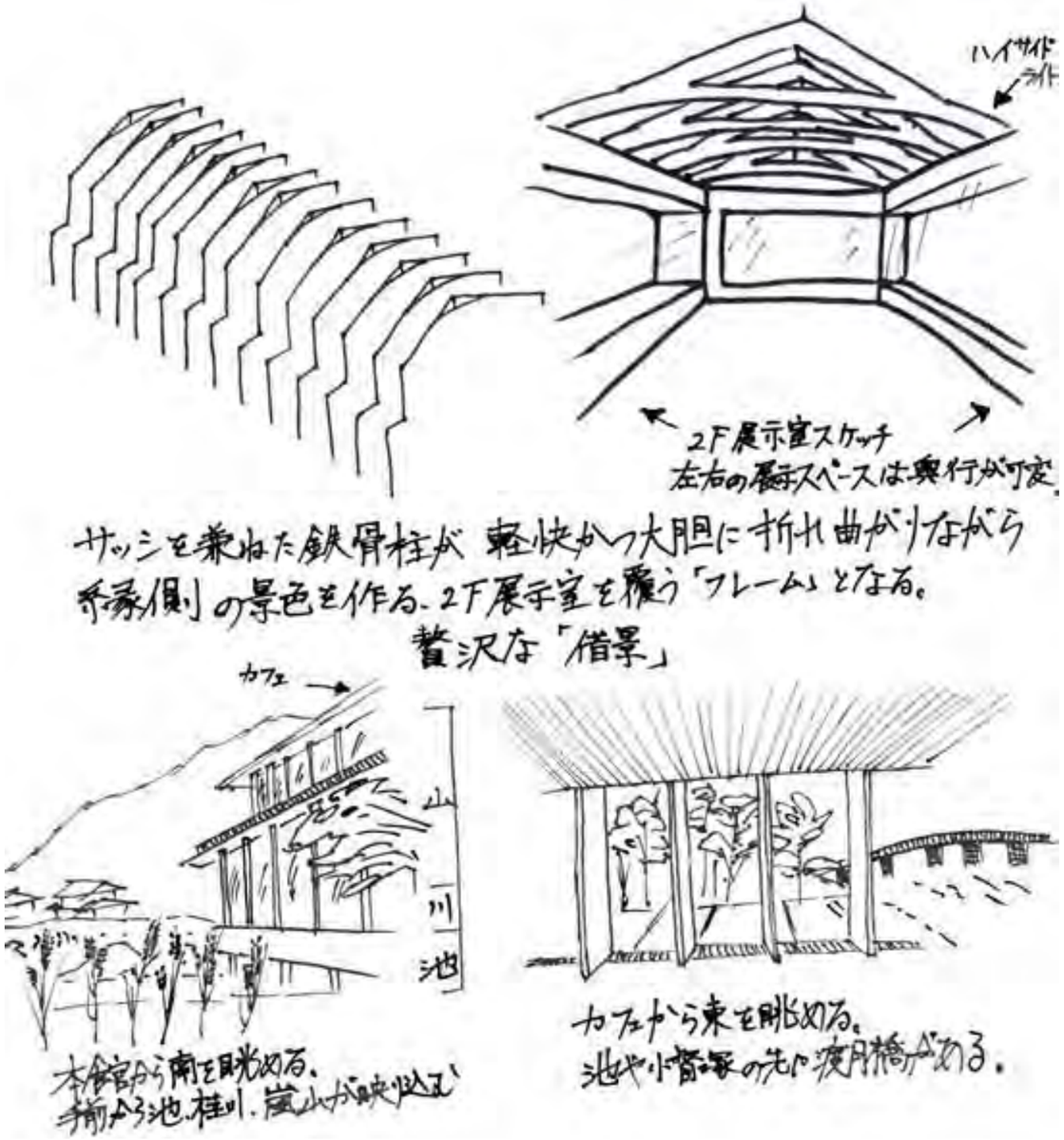
文・写真 16 佐々木悠心　イラスト 14 國本康平

～美術品を守る現代の蔵～

京都の嵐山地区は渡月橋や天龍寺などの数多くの歴史遺産や建築物が存在している。特に敷地周辺は日本瓦と土塀を用いた伝統的な景観が残っており、建築物の高さ、形態、意匠に至るまで細かな基準が設定されている。厳しい法的規制の範囲内で、自然と共存する建築物を設計することが要求された。

主なコレクションが江戸時代から近代にかけての日本画家の作品であったこともあり、コンセプトは美術品を守る「蔵」である。そのため、建物の随所に日本的な意匠を配してある。美術館全体は伝統的な京町家の特徴を踏まえたもので周辺の建物や自然と違和感なく溶け込むために和モダンな外観デザインであり「網代文様」を踏襲したパターンで積んだ大理石が目を引く。内観デザインはコンセプト通り、「蔵」をイメージした展示室や同じく網代文様から着想を得た壁面ガラスなどを取り入れている。

この網代模様の壁面ガラスはセラミックプリントを施したガラススクリーンの濃淡で光の明暗を制御する役割もある。このように、各意匠に機能を持たせることで京町家のデザインを合理的に取り込んでいる。



展示室はコンクリートの箱の形をしており、「蔵」をイメージしたデザインになっている。廊下は、中庭を一望できる縁側がイメージされている。その廊下の窓はガラス張りの窓でサッシを兼ねた鉄骨柱で、景色をかたどるフレームの役割を果たす。そして、鉄骨柱は折れ曲がりながら、1 階の屋根の垂木になり、2 階廊下のフレームとなって、最後は切妻屋根を支える梁、垂木（フレーム）として、蔵を上から覆っている。これを行うことで、一つ一つの空間に一体感が生まれていると思う。また、展示室を上から覆う形にしているので、軒と屋根の間に隙間が生まれて、ハイサイドライトを設けられている。

縁側やカフェから見える景色には、「借景」が行われている。本館からは、敷地内の鏡池を中心とした庭園の向こうに、京都桂川と嵐山を望むことができる。また南西にあるカフェからは、中庭と小督塚、右手には観光名所の渡月橋や、嵐山の街を望む。これらは鉄骨柱のサッシから、一枚のディスプレイのように切り取られて見える。そして、敷地外にある渡月橋、嵐山、桂川を借景として贅沢に取り込むことに成功している。新建築には、『中庭と借景を生かすために建物を敷地の北と西に配置した』とある。その土地の特性を活かしきったプランといえる。

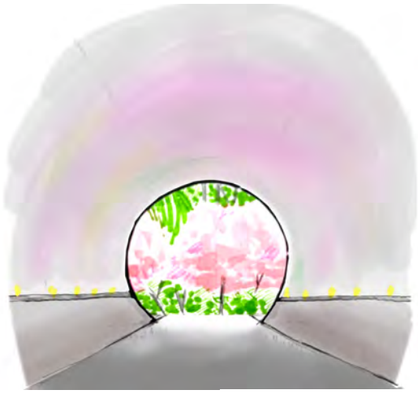
呉高専生による建築巡礼……No.1

MIHO MUSEUM

所在地＝滋賀県甲賀郡信楽町大字田代字桃谷 300　構造＝RC 造・一部 S 造　階数＝地下 2 階・地上 1 階・塔屋 2 階(美術館棟)　延べ面積＝2 万 780.587 ㎡　設計＝I.M.Pei-Architect＋紀萌館設計室　施工＝清水建設　竣工＝1996 年

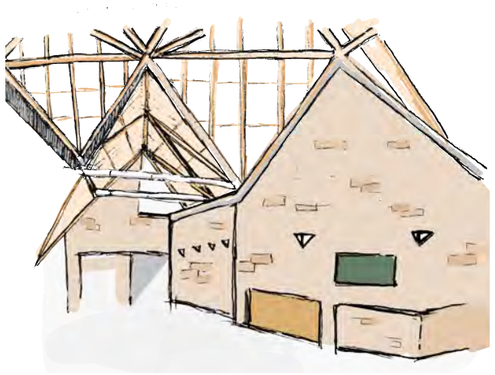
文･写真 平岡亜弥　イラスト 千田奈緒

現代の桃源郷



トンネルからは桜や、秋は紅葉などの幻想的な景色が見られる

吊り橋



幾何学模様で構成されたメインロビー

滋賀県甲賀市信楽町の自然豊かな山中にある「MIHO MUSEUM」は、ルーヴル美術館のガラスのピラミッドで知られる、世界的建築家 I.M.ペイ氏が手がけた。"桃源郷" をテーマに設計されたこの美術館は、周囲の自然景観を守るように建てられている。外観だけ見るとコンパクトに感じるが、それは四季折々の山の風景にとけこむよう､建築容積の 80%以上が地中に埋設されているためだ。受付とレストランがあるレセプション棟と展示室のある美術館棟は 500m ほど離れており、トンネルをくぐり橋を渡って行き来する。そのアプローチロードを歩いただけで別世界に迷い込んだような不思議な感覚になる。中国の古典である「桃花源記」の桃源郷をイメージして作られ、遊歩道には枝垂れ桜が植えられている。道なりに歩いて行くと、トンネルが現れる。トンネルは緩やかなカーブになっており、入口からは出口が見えない設計となっている。トンネルの内装には銀色のステンレス板を貼り付けているため、季節によって山の緑や桜の桃色を映す。時期によっては夕日も入ってくる。トンネルを抜けると吊り橋が現れる。吊り橋を支える半円形のアーチが特徴的だ。「MIHO MUSEUM ブリッジ」と呼ばれ、2002 年に国際構造工学会より最優秀賞を受賞した。吊り橋の下は谷になっており，自然が溢れている。そして吊り橋を越えると見えてくるのが、入母屋型の屋根の美術館棟だ。中に入ると、この美術館で最も印象的とも言えるエントランスホールがある。丸窓のついた大きなドアを開くと、ガラスの屋根から降り注ぐ光とベージュ色のライムストーンの壁面に包み込まれ、穏やかな山々が連なる大空間が広がる。どこにいても自然光を浴びることができ、信楽の山々を一望することもできる。また、天井は幾何学的なデザインが特徴的だ。そこから左手に行くと、南館(地下 1 階・1 階)のコレクション展、右手に行くと北館(2 階)の特別展へとつづく。美術館棟内にある「パインビュー」は、片側がガラス張りで日当たりも良く、開放感溢れるカフェとなっている。カフェ自体が山の斜面を見渡せるように建てられているため、ガラス屋根から太陽の光が差し込み、湖南アルプスの山並みを眺めながら､太陽と自然をたくさん感じられる。I.M.ペイ氏が「自然の中に同化した建物のすがたが、非常に意識的にデザインした結果だということをわかってもらえると信じている」と言うように、様々な美に触れながら、内観的な空間を楽しむことができる、そんな美術館だ。

所在地：長野県北佐久郡軽井沢町長倉 815
構造：鉄骨造一部鉄筋コンクリート造
階数：地上 1 階
延床面積：2118.26m²
全体敷地面積：約 10000m²
設計：西沢立衛建築設計事務所
施工：清水・笹沢建設共同企業体
工期：2009 年 6 月～2011 年 1 月

軽井沢千住博美術館

森の中の王蟲

文・写真 山﨑彩乃
イラスト 山岡好風

日本の芸術家「千住博」が 1978～2011 年の間に制作した約 100 点を所蔵・展示されている美術館。設計の際には、設計者 西沢立衛に対して千住博本人が「明るく開放的で、今までになかったような美術館に」とリクエストされたそう。これを受けて西沢立衛は「公園でもあり、同時にプライベートなリビングでもあるような、開かれた空間を目指しました。」と話している。

西沢立衛本人も話しているが、この美術館はまるで森の中を進むように展開していく。この感覚に陥るのには、この美術館が自由な曲線で構成されているからだ。
美術館が建っているこの敷地は 3.5m ほどの高低差があるが、ゆるやかに傾斜した床が連続的に空間をつなげている。天井高は 2.2～4.75m と展示されている作品などに合わせて、さまざまに変化している。このように床も天井も自由な曲線であるが、それぞれは異なる 3 次元曲面である。まっすぐカクカクとした順路の美術館と比べて、さまざまな曲線で構成された、この軽井沢千住博美術館は引き込まれるように、どんどん奥へと進みたくなる森のような空間を実現させているのだ。

また、上から下スレスレまで大きく開いたカーテンウォールは、建物の変形に追従できるように、エキスパンションをとりながら上下 2 辺支持とすることで、屋根を出来るだけキャンチさせることができ、深い軒をつくりだすことを可能としている。美術館という場所は作品を日光から守る必要があるため、この深い軒や UV カットガラス、シルバースクリーンで光を制御しつつ、森の中のような柔らかい光が入り込む空間をつくりだすことを可能としている。
ギャラリーには明確な仕切りがなく、屋根を支える構造体である耐力壁と非耐力の展示壁で構成され、ランドスケープのような一室空間になっている。コンクリート床には目地が入っており、この目地は来館者を導く誘発目地として機能している。また、各所に配されたオリジナルベンチなどの家具により、くつろぎながらのんびりと作品を楽しむことができる。建物にあいた 4 つの穴によってつくりだされたそれぞれ個性のある中庭には、約150種類、60,000株の植栽が施されている。大きく開いたカーテンウォールやアルミコーティングされたスクリーン越しに見えるこの景色には圧倒的な透明感がある。千住博の作品を鑑賞する際、視界に入るこの軽井沢の自然は、もはや作品の一部である。この美術館には、ここでしか感じられない千住博の作品があると感じた。

軽井沢千住博美術館のこの中庭は、まるで草木をかき分け進んでいき見つけた、木漏れ日の入る「ギャップ」のようだ。そんなことを、ふと考えた。

呉高専生による建築巡礼……No.1

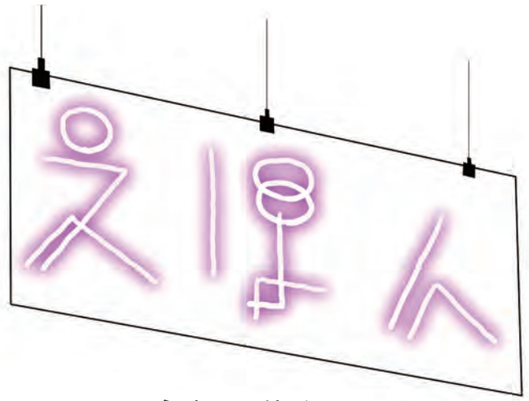
太田市
美術館·図書館
ART MUSEUM & LIBRARY,
OTA

設計　建築　平田晃久建築設計事務所
　　構造・設備　ARUP
施工　石川建設
延べ床面積　3,152.85m²
階数　地下 1 階　地上 3 階
構造　鉄筋コンクリート造　一部鉄骨
後期 2015 年 7 月～ 2016 年 12 月

4201911 亀田朋樹

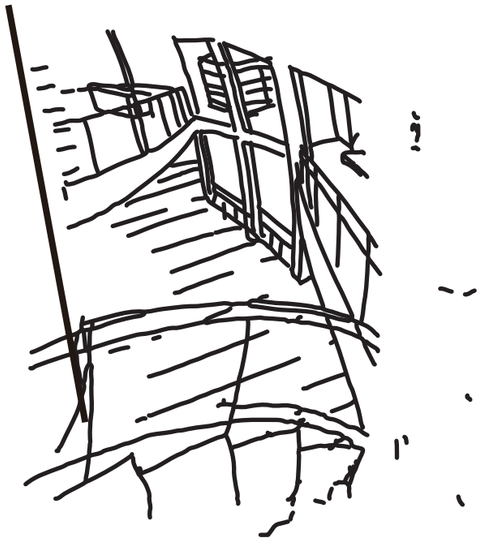
創造的太田人

平面図
黄：美術スペース
青：図書スペース



ネオンのサイン

カーブミラー型のサイン



階段から中央ホールを望む

図書スペースから美術展示スペースが見える

創造的太田人。太田市は中小の工場が遍在する、ものづくりの DNA をもった土地だ。一方で、中心市街地の衰退、人口減少と高齢化への対応など、様々な都市課題を抱えてもいる。市は「ものづくり」を通して育まれてきた太田市民の創造性を、これからの「まちづくり」に生かしていくと決めた。最先端の評価をされている表現や斬新な発想により人々の感性を刺激する多彩な美術作品と、創造的発想の源泉となる広範な知識を提供する図書資料を、同時に閲覧できる場所を提供する。太田人の創造心を開花させるのだ。

群馬県太田市、太田駅から徒歩 30 秒にある美術館・図書館・カフェの複合施設。ばらまかれた箱とそれに巻き付くスロープ。それぞれ異なる魅力を持ったいくつかの箱がある。それは、ギャラリーだったり、カフェだったり、座って本が読めるところだったり、静かに勉強できるところだったり様々。来訪者は居心地のいい場所を見つけて、それぞれの時間を楽しむことができる。特徴を持ったいくつかの箱の間を抜けるように歩くのは、街の中を歩くのと連続した楽しい経験だ。こうした散策の中で、人は興味のある本や、驚きを与えてくれるアートや、太田に関する新しい情報や、様々な友人達に出会うことがでる。内部は様々な方向に視線が抜け、行ってみたくなる場所がかいま見えるようになっている。例えば図書館にいながら美術館でのワークショップが、カフェから図書館の本棚が、駅から図書館のスロープを行き交う人々の活気がかいま見える。

東・南・西面に入り口があり、気軽に通り抜けることができる。3 階建てであるが、緩やかなスロープで全体が連続的に結ばれている。全ての空間が街の延長にある。人や物が街からやってきて、この場所を通り、また街へ帰っていく。アートや本、人など無数の流れの結び目のような建築。

箱の上面には土が詰め込まれ、木が植えられている。この屋上庭園は開館中なら誰でも入ることが可能だ。屋上からは少し閑散としてしまった太田の街が一望できる。ここを基軸に栄えていく太田を想像する。外からこの建築を見ると、木と鉄骨造のスロープで包まれまるで金山や天神山古墳といった太田に点在する丘のようだ。

「街を取り込む、街に溶け込む」という大きなコンセプトがあった。サイン計画も街中で見られる看板的な役割を取り込んだデザインとなっている。例えば、ネオンサインやカーブミラー。名称や方向を示すサイン自体がアートみたいに楽しめるようになっている。

この美術館は人々の流れをもう一度駅前に呼び戻し、駅前の街並みを歩いて楽しい魅力あるものに育てていくための十分な力を持っている。